中学校におけるヴァイオリン実技の授業の試み

Attempts of Music Classes with Playing the Violin in Junior High School

音楽科　中山　由美

要　　旨

本研究は、義務教育９カ年の音楽科の学習内容に、擦弦楽器の実技体験が含まれていないことに注目し、中学校音楽科で擦弦楽器の実技を実施することにより、歌唱やリコーダー等の吹奏楽器演奏時とは異なる新たな視点から、音符と音符の間にある「持続音」に対して表現の特徴に興味をもち、自らの表現や鑑賞の能力伸長につながる可能性があることを明らかにすることが目的である。

本論文では、擦弦楽器の中で最も身近な楽器であるヴァイオリンの授業開発について述べる。特に、①演奏未経験の教師でも運営できるヴァイオリンの授業を開発し提案すること、②楽器が高価である点の問題解決として「１万円ヴァイオリン」が授業で活用できることの検証を目的とした。

研究成果は次の２点である。①演奏未経験の教師でも取り組める導入の４時間、発展題材の４時間の授業を開発できた。導入４時間は、身近な音楽やポップスナンバーを教材とした。初学者には開放弦でベース音、経験者は主旋律の演奏に割り振り伴奏と合わせる合奏を行った。左手の運指練習では、ギターや三味線を参考にしたTAB譜を開発し、運指や楽器の構え方、ボーイングの方法に短時間で親しめる授業を実施した。発展題材４時間では、「カノン」を他の楽器とアンサンブルする授業を実施し、生徒の活動の観察、授業後のふり返りの記述の検討から両題材の妥当性を検証できた。②「１万円ヴァイオリン」は、遜色なく授業で活用できる楽器であることがわかった。また、中学生は４/４サイズのため、備品として揃えやすいことがわかった。

キーワード：中学校音楽　ヴァイオリン実技授業　１万円ヴァイオリン　持続音の表現

Ⅰ　はじめに

1　研究の背景～擦弦楽器の実技が音楽教科書にない現状

中学校の音楽授業へ擦弦楽器の実技を導入しようと考えたのか、以下にその理由を述べる。

小学校から中学校までの９年間の音楽授業の中で弦楽器の実技は、ギター・箏・三味線のような撥弦楽器が中心である。教科書で擦弦楽器に触れる題材として、小学校第３学年（教育出版）、小学校５学年（教育芸術社）の鑑賞領域から始まり、世界の諸民族の音楽の学習における馬頭琴・二胡などがある。しかし、実技に関しては中学校第３学年まで９カ年の教科書に記載はなく、音楽授業で擦弦楽器を演奏する場面は設定されていない。

擦弦楽器の実技の設定がない原因として、楽器が一般的に高価で揃えにくい、チューニングの必要度が呼吸を使う楽器以上に深刻であり生徒にとって技術的にも困難である、奏法に慣れるまでに連続的な時間を要する、の３点ではないかと筆者は考えた。

生徒たちにとって擦弦楽器、一般的に知名度が高いヴァイオリンに対してどのようなイメージをもっているかについて調査をした[1]。その結果、「難しそう」が最も多く57名中39名いた。以下、高額（19名）、高貴な感じ、神秘の楽器、良家の子女が習っている（それぞれ１名）、といった言葉が並ぶ。ヴァイオリンは名前も音も知っているが、一部の人のための楽器で自分には縁遠い、ととらえている生徒

が多い。一方で、きれい（25名）、オーケストラに欠かせない楽器（８名）というように、あこがれの気持ちをもち、家族が習っているので身近な楽器（１名）、葉加瀬太郎（２名）というように、身近に感じている傾向も見られた。また、ドラえもんの「源静香ちゃん」が弾く楽器として知られており、「しずかちゃんが弾くギィギィしたヴァイオリンの音」（３名）という記述もあった。この「ドラえもんの静香ちゃん」については、変な音が出てしまうのではないかという不安の原因として挙げている点が興味深い。

このように多くの生徒にとって、撥弦楽器の中でもヴァイオリン属は、テレビやお店のBGM等を通して日常的に聴く機会はあり身近な存在ではあるが、演奏に関しては、家庭での習い事や学校のクラブや部活動の場というように限定的なのが現状である。そのため、聴き慣れている撥弦楽器が演奏楽器としては身近な存在ではないのである。

2　研究の構想

(1) ヴァイオリン演奏体験による持続音への感性伸長の可能性

表現媒体は、音が持続できるか（伸ばせる）できないか（伸ばせない～減衰する）の２つの特性に分けられる。つまり、打楽器、ギターや三味線などの撥弦楽器は発音した後、減衰する特性があり（ただしアコースティックギターは減衰するが、エレキギターはエフェクターを使って持続する音をつくることができる）、リコーダーなどの吹奏楽器は、息を入れて音を出すため音を持続させながら表情をつけることができる特性がある。息を使うという点では、歌唱にも通じる表現媒体である。

一方、息を使わずに持続する音をもつ楽器に擦弦楽器がある。擦弦楽器は弦を弓でこする摩擦によって発音する。前述のとおり、擦弦楽器のうち、音として最もなじみのあるのはヴァイオリンである。

ヴァイオリンは、ギターと異なりフレットがないため、音高を聴きながら判断して左指で押さえて弓を操作しなければならない。そのため、音高・音程に対する高い注意力が必要となる。

また、擦弦楽器の演奏表現は、弓の操作（ボウイング）の動きの大小や音を出す瞬間の動作がそのまま音楽の表現につながり、息を使う楽器よりも目に見えやすいことも特徴である。

以上から、ヴァイオリン演奏を経験することによって、新たな発音原理を体験し、歌唱やリコーダーなどの呼吸を使う楽器による持続音の表現に対し、新しい角度からの気づきが生まれ、持続音への工夫や配慮をする感性が高まり、表現力の伸長が期待できるのではないか、また、鑑賞の活動において、ヴァイオリン属が奏でる音に対して、演奏の実感を伴って耳を傾け、新しい気づきができるようになるのではないか、と考えた。

(2) ヴァイオリン授業の一般化に向けて

1) １万円ヴァイオリンの活用の検証

ヴァイオリンのレンタル料は１台月額およそ4,000円以上かかる。しかし、ワークショップのような短期的な体験学習ではなく、日常的な楽器として活用するには経費が掛かりすぎる。

そこで、ヴァイオリンが高価である点をクリアするために、本研究では「１万円ヴァイオリン」を活用することにした。「１万円ヴァイオリン」の活用に関して、特に問題がないことを専門家から助言を受けているが、授業で活用するに耐えられる楽器なのかどうかを本研究で検証することにした。この楽器が活用できるならば、音楽授業において予算面での問題が軽減し、ヴァイオリン実技が一般化できる可能性が拓ける。

2) 演奏経験が乏しい授業者でも可能なヴァイオリン授業の開発

大学の入学試験や採用試験の現状から考えても、音楽教師になるために最低限必要とされている実技は、ピアノと歌唱である。そのため、音楽教師といえどもヴァイオリン演奏の経験がある人ばかり

ではない。筆者も大学の授業で１年間受講した経験しかない。そこで、本研究では、ヴァイオリン演奏経験が乏しい授業者でも運営できる授業の開発をし、検証することにした。

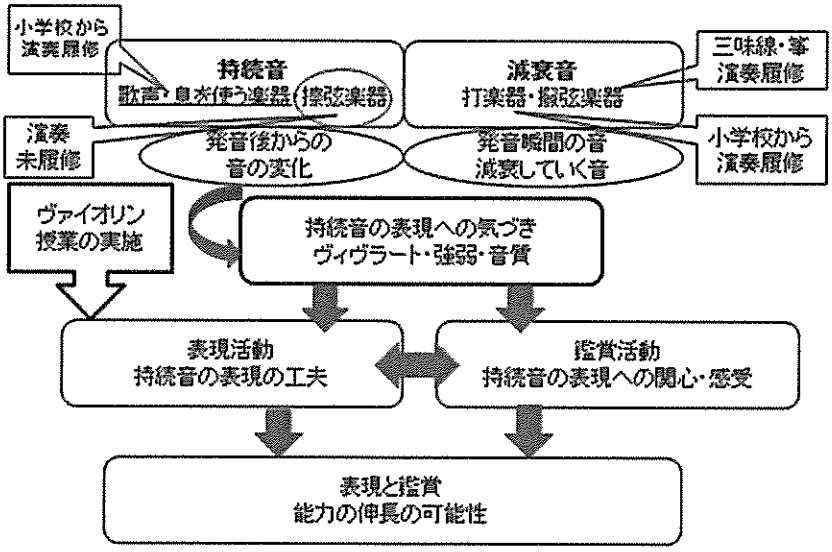
開発する授業は、授業者も生徒と共に技能を習得していけることを想定している。

3) グループ活動の効果の検証

ヴァイオリン学習はともすると個人練習が中心となりがちになる。ほとんどの生徒が初学者であること、そのために初学者のつまずきや克服しなければならない点が共有できることに注目し、グループ活動が活発にできる学校の音楽授業においてヴァイオリン実技を取り入れる意義を検証することにした。できないこと、課題と感じることを仲間と共有し、一緒に練習に取り組む場面を設定することによって、課題に対して知恵を出し合いながら克服していく楽しさや達成感を味わえると考えた。初学者にとって共通して困難さを感じる点は、肩と首で楽器を支え続けること、４つの弦を弓で弾き分けボウイングすること、正しいポジションを左指で押さえて音程をつくることの３点と捉えた。本研究では、チューニングを生徒が行うことは範囲としていない。本研究の次の段階において、チューニングの技能習得は協働的な課題解決にふさわしいテーマと捉えている。

課題をグループの仲間で共有し、知恵を出し合いながら練習を進めていく場面を設定する。お互いの演奏の様子を見合いながら気づいたことを話し合い、演奏練習する一連の活動の中で、現行学習指導要領で求めている思考・判断・表現の力が発揮できることが期待できると考えた。

以上の研究の構想をまとめたのが図1である。



（図１） 研究の構想

3 研究仮説

以上の背景と構想から、以下の研究仮説を立てた。

＜研究仮説＞

擦弦楽器の演奏体験をすれば持続音の表現への気づきが育ち、表現及び鑑賞の能力が伸長するだろう。

4 研究の範囲と内容・方法

(1) 研究の範囲と内容

研究仮説「擦弦楽器の演奏体験をすれば持続音の表現への気づきが育ち、表現及び鑑賞の能力が伸長するだろう。」は、２段階に分けられる。第１段階は「擦弦楽器の演奏体験をすれば」を具現化す

ること、つまり、ヴァイオリン実技授業の開発である。第２段階は、開発した授業を実施した後、「持続音の表現への気づきが育ち、表現及び鑑賞の能力が伸長するだろう」について授業実践を通して検証することである。

（図１）は本研究の構想図である。

①演奏経験が乏しい教員でも実施可能なヴァイオリン演奏の授業、及びヴァイオリンを組み合わせた合奏の授業を開発する。

②「ヴァイオリンが高価で授業に導入できない」を解決するために、１万円ヴァイオリンが授業で活用できるのかどうかについて検証する。

(2) 研究の方法

1) ヴァイオリン専門家から初学者向けの指導法についてレクチャーを受け、演奏経験が乏しい教師でも実践できるヴァイオリン授業を構想、考案し、勤務校において検証授業を実施する。授業開発については、筆者が継続研究している「授業マネジメントの考え方と方法」に基づいて進めていくこととする[2]。

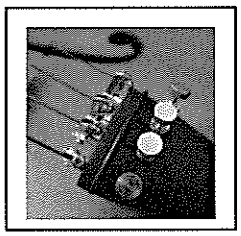
2) 検証授業は、授業支援者とのＴ・Ｔ授業とし、授業省察と授業改善を毎時後に行い、授業での生徒の活動の観察、及び授業後に行ったふり返り調査結果の分析をして、授業の妥当性を検討する。

3) １万円ヴァイオリンを検証対象学年の第１学年だけでなく、第２・３学年でも活用し、音色、操作性、耐久性等の観点から検討し、活用が可能なのかどうかを明らかにする。

Ⅱ　授業の構想

1　楽器

本研究で使用する楽器は、「Hallstatt ハルシュタット ヴァイオリン V-12 4/4サイズバイオリン（ライトハードケース、弓、弦、松ヤニ、ピッチパイプ付）定価12、960円」である。Hallstatt シリーズの中では最も安価な楽器である。ケース、弓、松脂、替え弦までセットになっているので便利である。インターネットのレビューではさまざまな評価がある[3]。すべての弦にアジャスター（図２）がついているため、初学者でもチューニングがしやすい[4]。本校では35台まとめて購入したため、割安で入手できた。なお、本研究で肩当ては使用しない。



(図２) アジャスター

2　教材曲

初学者向け導入のための教材曲の設定については、本研究の授業協力者であるヴァイオリニスト・就実大学講師、安久津太一氏に助言を賜った。

開放弦で弓を自由に動かして感触を確かめる活動では、ジャズのスタンダードナンバー「Sing! Sing! Sing!」（音源；マンハッタン・ジャズ・オーケストラ演奏：iTunes より購入）を使用する。

開放弦だけで合奏する楽曲として、1・2弦を使った合奏では「喜びの歌」（ベートーヴェン作曲「交響曲第９番第４楽章テーマ冒頭８小節)、「ちょうちょう」、２・３弦を使った合奏では「エトピリカ」（葉加瀬太郎作曲)、２・３・４弦を使った合奏では「恋するフォーチュンクッキー（音源：2013年AKB48歌唱：秋元康作詞・伊藤心太郎作曲：iTunes より購入）を取り上げる。それぞれの楽曲では、主にベース音を開放弦で演奏する。

また、発展題材としての他楽器との合奏では、パッヘルベル作曲「カノン」（ニ長調）を取り上げる。「カノン」は小学校ではハ長調のリコーダー奏として第6学年の教科書に掲載され[5]、履修してきてい

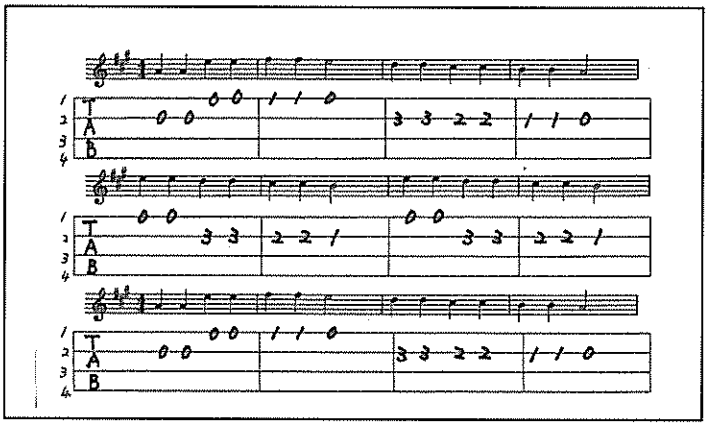
る生徒もいる。「カノン」を「持続音」と「減衰音」の楽器の組み合わせ、つまり、ヴァイオリンの他に、ソプラノリコーダー、三味線、ピアノ（キーボード）等で合奏する設定である。

3　楽譜

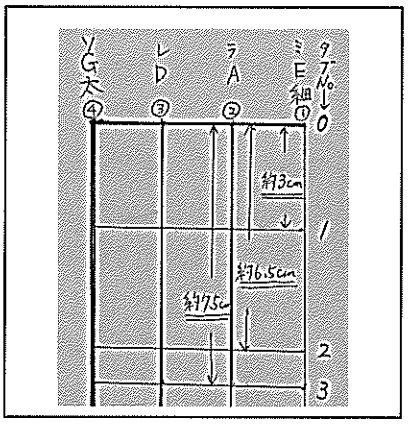
器楽では、読譜しながら楽器を操作するケースが中心である。ヴァイオリンの楽譜は通常、五線譜を使い、必要に応じて指番号を書き入れて練習する。しかし、五線譜を速読して即座に音高を認識し、左指が適切なポジションをとらえて押さえる、ということができるようになるには時間がかかると予想した。ヴァイオリンの場合、音高が読めても即座に弦のポジションを判断して押さえる、という一連の行為が初めての場合は困難である。

そこで本研究では、初学者が音高のポジションをつかみやすいように、三味線の文化譜やギターのTAB譜を参考に、A-durの音階でのポジションに番号を付けたTAB譜を作成した（図3）。TAB譜は、検証授業を進めていく中で、生徒からの「もっと演奏しやすくなる楽譜がほしい」というリクエストに応えて工夫し、作成したものである。

さらに、各ポジションまでの開放弦の位置「0」からのおよその距離（1→約3cm、2→約6.5cm、3→約7.5cm）で示す図をつくった（図4）。このポジション距離の図も、生徒から「押さえる位置をもっとわかりやすく書いてほしい」というリクエストに応えてつくったものである。



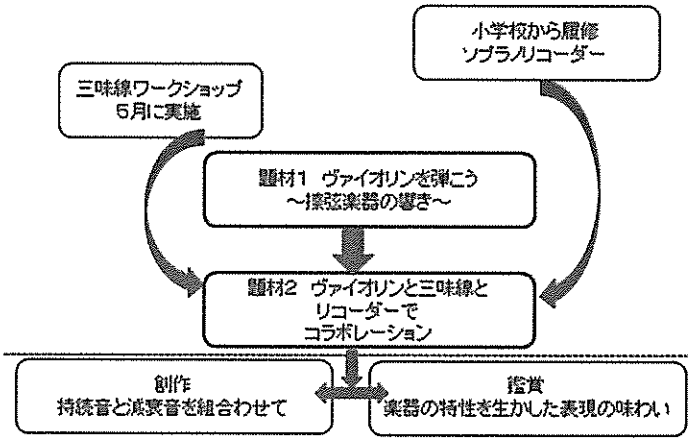
（図3）タブ譜



（図4）ポジションを示す図

4　授業の構成

以上までのことを踏まえ、本研究で構想した授業の構成は（図5）の通りである。



（図5）授業の構成図（本研究の範囲は横線より上の内容）

Ⅲ　検証授業の実施

1　検証授業の対象学年と実施時期

検証授業は、第１学年４クラス117名（男子34名女子83名）を対象に実施した。ヴァイオリン実技経験者は14名（男子３名、女子11名）である。

実施時期は以下の通りである。

・題材名「ヴァイオリンを弾こう～擦弦楽器の響き～」

第１時　2014年６月９日　第２時　2014年６月16日

第３時　2014年６月19日　第４時　2014年６月23日

・題材名「ヴァイオリンと三味線とリコーダーでコラボレーション～『カノン』の合奏をつくる」

第１時　2014年10月16日　　第２時　2014年10月21日

第３時　2014年10月28日　　第４時　2014年11月４日

2　授業展開

(1) 題材名「ヴァイオリンを弾こう～擦弦楽器の響き～」

1) 題材について

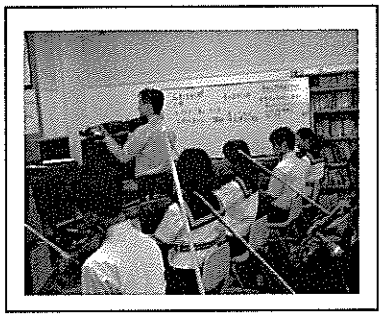
音楽授業における実技指導は、一般的に行われているメソッドに基づいたレッスンの方法はとらず、擦弦して音を出すことが意外にも容易であることを感じ取らせたいと考えた。

そのため本題材では、開放弦で気持ちよく音を出す活動を中心とした第１時の導入場面を大切にしている。ヴァイオリン専門家とのＴ・Ｔにより、生演奏を聴く場面を多く設定することにより、意欲を喚起させる。ピアノ伴奏の支えにより開放弦だけで合奏できる楽曲を教材とし、初学者であってもすぐに演奏を楽しむことができる授業を設定した。

開放弦で楽しく音を出す活動の次に左手の運指でさまざまな旋律を弾く活動に移る。本題材では、前述したように初学者が演奏に取り組みやすいように、五線譜の他に、弾くべき弦とポジションがわかりやすくなるようなTAB譜をつくった。これは、本題材の前に実施した三味線ワークショップで活用した文化譜を応用した楽譜である。

本題材によって、擦弦楽器の発音原理を実感し、左指で正しい音高を探すフィンガリングを体験することによって、何げなく聞いていたヴァイオリンの音色に新たな視点から興味をもてるようになることを期待している。

2) 授業の概要（４時間扱い）

時間	目標	内容と展開概要
第１時	擦弦による発音を体験により実感し、開放弦（１弦→２弦→３弦→４弦の順）の演奏を通してヴァイオリン演奏に親しむ。 	1　１万円ヴァイオリンと100万円ヴァイオリンの音比較 2　１弦を開放で自由に擦って音を出し、「Sing、Sing、Sing」の音源に合わせて演奏する。 3　１弦と２弦を４拍ずつ交互に演奏する。 4　Ｔ１がピアノで演奏する「喜びの歌」(ベートーヴェン）に合わせて、２弦と１弦を４分音符４拍ずつ交互に演奏して合わせる。 5　Ｔ１がピアノで演奏する「ちょうちょう」に合わせて、２弦と１弦を８拍ずつ交互に演奏して合わせる。 6　Ｔ１がピアノで演奏する「エトピリカ」に合わせて、３弦、２弦を４分音符２拍ずつ交互に演奏して合わせる。 7　「恋するフォーチュンクッキー」の音源に合わせて２・３・４弦を演奏し、合わせる。

第２時	左手の弦のポジション位置と押さえ方（１弦のＦ♯）を知り、「きらきら星」の２小節を演奏する。	1　開放弦で前時のレパートリーを演奏する。 2　１弦の第１ポジションの位置を確認しながら人差し指で押さえ弓で擦って音を出す。 3　グループ練習をする。
第３時	左手の弦のポジション位置と押さえ方（２弦のＤ・Ｃ♯・Ｈ）を知り、「きらきら星」を全曲演奏する。	1　開放弦でレパートリーを演奏する。 2　前時の復習をする。 3　２弦のＤ・Ｃ♯・Ｈのポジションを押さえて弾く練習をする。 4　「きらきら星」全曲をグループ練習する。
第４時	「カノン」（パッヘルベル作曲）の主題をニ長調で演奏する。	1　開放弦でレパートリーを演奏する。 2　「きらきら星」を演奏する。 3　「カノン」の４小節をグループ練習する。

3）展開

①第１時

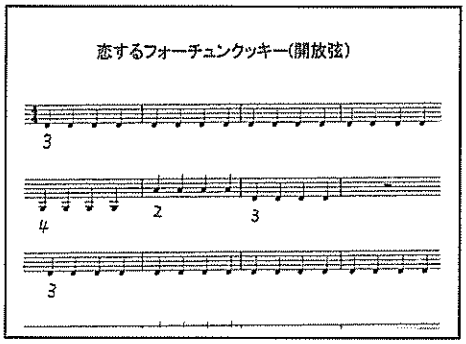
あらかじめ、全楽器をチューニングし、椅子の脇に置いておく。楽器には番号札を付けておく。

第１時は楽器との出会い、最初歩の場面であるため、第１学年４クラスと第３学年２クラスは筆者と安久津太一氏とのＴ・Ｔを実施した。

そこで、Ｔ・Ｔの授業を、演奏家と授業者、Ｔ１（筆者）とＴ２（安久津Ｔ）の役割をわかりやすくするために、発問と支援、生徒の反応、の形で授業記録を以下に示す。

学習内容と活動	教師の発問（Ｔ１）と支援（Ｔ２）・生徒の反応（S）
1　１万円ヴァイオリンと100万年ヴァイオリンの聴き比べクイズをする。 ・１曲目「きらきら星」 ・２曲目「情熱大陸」	Ｔ１「今日からヴァイオリンの授業をします。ヴァイオリンというと高ければ何億円もする高いイメージがありますが、今回使うヴァイオリンは、１万円のヴァイオリンです」 S（「エー！」とどよめき、ややがっかりしたような雰囲気が漂う。 Ｔ１「安い楽器かぁと思った人も多いと思いますので、これから１万円ヴァイオリンと先生がお持ちの100万円ヴァイオリンの聴き比べをします。どれだけの違いがあるのか、聴き比べてみましょう。ただ聴き比べるのはおもしろくないですから、クイズにしましょう。どちらが高いヴァイオリンでしょうか、音だけで判断できるように、隣の部屋でＡとＢのヴァイオリンとヴァイオリンを安久津先生に弾いていただきますので、どちらの音が100万円の楽器かよく聴いて判断してください。それでは、まずＡの楽器から弾いていただきます。」 Ｔ２（Ａの楽器で「きらきら星」を演奏する） S（じっと耳を傾けている） Ｔ１「それではＢの楽器でお願いします」 Ｔ２（Ｂの楽器で「きらきら星」を演奏する） S（Ａと比べようとさらに集中して耳を傾けている） Ｔ１「どうでしたか。それでは違う曲で比較してみましょう。それではＡ、Ｂの順でお願いします。」 Ｔ２（「情熱大陸」を演奏する） S（わかった、という表情やどちらとも言えない、という表情で聴いている） Ｔ１「それでは、聞いてみましょう。Ａの方が高いと思った人？Ｂの方が高いと思った人？」 「それでは、楽器を見てみましょう。外見ではどちらの方が高く見えますか？」 「先生、どちらが高い楽器ですか」 Ｔ２「Ｂの方が高い楽器です」

	S（「やっぱり！」という声やどよめきの声が上がる） T1「確かにみなさんの多くが高い楽器だと思った方が高い楽器ですし、違いがあって当然でしょうが、でも、両者に100倍の違いが感じられますか？要は、楽器も大切ですが、弾き手がうまければ楽器もなるということですね。初学者の我々が使うのに1万円ヴァイオリンで十分だと思いませんか？」 S（大きくうなずいている）
2　楽器を出して音を出してみる。	T1「それでは、実際に楽器を弾いてみましょう。ケースからまず弓を出して、ねじを巻いて弓を張っていきます。間に小指が入るくらいの感じです。先生の弓の張り具合を参考にしてください。」
・自由にボウイングする。	T1・T2（一人ひとりの弓の状態をチェックする）T2「みなさん、初めはどんなふうに持っても構いませんから、楽器を左手、弓を右手に持って擦って音を出してみてください」（T1・T2も弦を擦って音を出しながら活動の様子を観察して回る） S（ある程度ヴァイオリンの構え方ができている生徒、胸やお腹の前に楽器を置く生徒、膝に置いて弾いている生徒などがいる）
・楽器の構え方を知る。	T1「はい、いろいろな構え方で弾けました。では、楽器の持ち方を先生にやっていただきます。」 T2「顎と肩甲骨ではさんで、左手は軽く添えます」
・1弦を弾く。	T1「ではその構え方で1弦、一番細い弦だけを弾いてみてください」 T1「立って弾いてみましょう。音楽に合わせて気持ち良く、弦の上で弓がスケーティングするみたいに音を出してみましょう。」 T2（演奏しながら生徒の間を歩き回って支援する） T1「座りましょう。それでは、今度は2弦、ひとつ内側の弦を弾いてみましょう」 （A→D→A→Dのコードをピアノで弾きながら拍を安定させる）
・2弦を弾く	T1「では、2弦を4回、1弦を4回、交互に弾けるかな？どうぞ」 （A→D→A→Dのコードをピアノで弾きながら拍を安定させ、軌道に乗ってきたところを見計らって「喜びの歌」のメロディをコードと共に演奏する）
3　2弦と1弦を交互に弾き、「喜びの歌」のピアノ演奏に合わせる。	T2（生徒と一緒に1・2弦を弾いたり、「喜びの歌」のメロディを弾いたりする） T1「すごい、1曲できちゃいましたね。では今度は、1弦を8回、2弦を8回というのを繰り返して弾けますか？」 （A→E→A→Eのコードをピアノで弾きながら拍を安定させ、軌道に乗ってきたところを見計らって「ちょうちょう」のメロディをコードと共に演奏する） T1「もう2曲弾けましたね。ちょっと休憩しましょう。初めて触る楽器は疲れるものです。ここで、ヴァイオリンの演奏をしていただきましょう」
4　教師の「エトピリカ」の演奏を聴く。	T1・T2（「エトピリカ」をヴァイオリンとピアノで演奏する） T1「聴いたことがあるでしょう？これもみなさんと合奏できるのですよ。3弦を弾いてみましょう」 （D→G→D→Gのコードをピアノで弾いて支える）
5　3弦と2弦を交互に弾き、「エトピリカ」のピアノ演奏に合わせる。	T1「では、3弦を2回、2弦を2回、交互に繰り返し弾いてください」 （D→A→D→Aのコードをピアノで弾きながら支え、スムーズに音が出るようになったら、「エトピリカ」の演奏に切り替えて、開放弦の演奏に合わせる） T2（生徒の様子を観察しながら、主旋律を演奏したり、開放弦を演奏したりする）

5　4弦・3弦・2弦を使って「恋するフォーチュンクッキー」の合奏をする。	T1「『エトピリカ』まで合奏できました。それでは、4弦です。4弦の音を出してみてください。」（『恋するフォーチュンクッキー』楽譜（図6）を配布する） T1「『3弦を4回ずつ4小節、4弦を4回、弦を4回、3弦を4回、休み』これを演奏してみましょう」 （初めは、楽譜通りの音でピアノを弾き、慣れてきたところを見計らって、主旋律とコードの演奏に切り替える。 様子を見て演奏しやすいテンポで伴奏する） T1「では、全部通して合奏してみましょう。」 T2（主旋律を弾く） T1「では、ちょっとテンポは速いのですが、AKB48の音源に合わせて弾いてみましょう。 みなさん起立して演奏しましょう」 T1（音源を流す） T2（生徒の様子を見ながら、主旋律や開放弦を弾き、合奏を支える）  （図6）
6　後片付けをする。	T1「今日はたくさん、やりました。でも毎時間復習から入りますので、心配しないでください。それでは、これから後片付けをします。まず、弓のねじを少しだけゆるめてください。ゆるめたらケースにしまってください。楽器本体は、布できれいに吹いてからケースにしまってください。自分が使っている楽器の番号を覚えておいてください。いつも同じヴァイオリンを使うようにしましょう。

第2時から第4時は、演奏経験のない教師一人で授業を実施した。以下に授業の流れを示す。

②第2時

	主な学習内容と活動	指導上の工夫・配慮
課題設定	○ヴァイオリンの開放弦を使ってピアノ演奏に合わせて音を出す。	○「喜びの歌」「ちょうちょう」「エトピリカ」「恋するフォーチュンクッキー」のピアノ伴奏をする。
	左手、人差し指で1弦の第1ポジションの位置を押さえて「きらきら星」の2小節を弾いてみよう。	

課題追究	○1弦開放（0ポジション）から3cmぐらいの位置（1ポジション）を人差し指で押さえて弾いてみる。 ○1弦0ポジションと1ポジションを交互に弾いてみる。 ○「きらきら星」の2小節を、グループで円陣をつくり、お互いに見合ったり聴き合ったりしながら、正しい音程をつくる。【思考・判断・表現】 ○全員で「きらきら星」の2小節を演奏する。【思考・判断・表現】	○プロジェクターでポジションを図示し、生徒の活動の様子を観察して支援する。 ○左手人差し指を立てて1弦の1ポジションをとらえられるように助言する。手のひらが楽器についていないかどうか確認する。 ○お互いによく音を聴き合いながら練習するように指示し、キーボード等で正確な音程を出せるように準備する。 ○3小節以降は、経験者を中心にピアノ伴奏と共に演奏するように助言する。
省察	○ふり返りをする。 ・自分の課題点を意識しながら練習したか。 ・残された課題点は何か。 ・お互いに意見やアイディアを出し合いながら練習に取り組めたか。	○ふり返りカードに記入する際、左手の使い方について、成果と課題をふり返るように助言し、次時への学習の目標を考えるようにする。

③第3時

	主な学習内容と活動	指導上の工夫・配慮
課題設定	○ヴァイオリンの開放弦を使ってピアノ演奏に合わせて音を出す。 ○「きらきら星」を演奏し、課題点を出し合う。【思考・判断・表現】 ○本時の課題	○「喜びの歌」「エトピリカ」「恋するフォーチュンクッキー」のピアノ伴奏をする。 ○1弦1ポジション、2弦1・2・3ポジションの場所を確認する。
	グループで知恵を出し合い、協力して、ボウイングや左指1・2・3のポジションを確認し合い、気持ちよく「きらきら星」を演奏できるようになろう。	
	○グループで練習すること、共有する課題を一緒に解決しようとすることを確認する。	○お互いに気軽に話し合いながら練習を進めるように指示する。
課題追究	○グループに分かれて練習する。【思考・判断・表現】 ○練習成果を演奏発表し、聴き合う。【思考・判断・表現】 ○全員で「きらきら星」を演奏する。	○練習場所を5カ所設定する。（音準-1班、音楽室前-2班、後-3班、PC室4班・5班） ○音程が正しいか、息を合わせて演奏できているか、について聴き合うように指示する。 ○ピアノ伴奏をする。
省察	○ふり返りをする。 ・自分の課題点を意識しながら練習したか。 ・残された課題点は何か。 ・お互いに意見やアイディアを出し合いながら練習に取り組めたか。	○楽器をケースにしまい、「ふり返りカード」に本時の感想・反省・次時への課題等を記入するように指示する。 ○次時の予告をする。

④第４時

	主な学習内容と活動	指導上の工夫・配慮
課題把握	○ヴァイオリンの開放弦を使ってピアノ演奏に合わせて音を出す。 ○「きらきら星」を通奏する。 【思考・判断・表現】 ○「カノン」の冒頭部分を鑑賞する。	○前時までの復習をして、ボウイング、左手の運指の動きがスムーズにできるように、様子を観察しながらピアノ伴奏する。 ○テーマの旋律に注意して聴くように助言する。
	左手のポジションを覚えて「カノン」の主題を演奏してみよう。	
課題追究	○楽譜を見ながら、適するポジションを押さえて音を出す練習をする。 ○グループで円陣をつくり、お互いに聴き合い、見合いながら練習に取り組む。 ○グループごとに練習の成果を発表し合い、アドヴァイスし合う。 【思考・判断・表現】	○どの弦でも１・２・３のポジションの距離は同じであることを助言し、左指を置く場所を具体的な数字で助言したり板書したりする。 ○お互いにアドヴァイスをし合いながら練習を進めていくように指示し、練習の様子を観察しながら、適宜、助言をする。 ○テンポを安定させるために、適宜手拍子を入れる。
省察	○ふり返りをする。 ・自分の課題点を意識しながら練習したか。 ・残された課題点は何か。 ・お互いに意見やアイディアを出し合いながら練習に取り組めたか。	○楽器をケースにしまい、「ふり返りカード」に本時の感想・反省・次時への課題等を記入するように指示する。 ○次時の予告をする。

(2) 題材「ヴァイオリンと三味線とリコーダーでコラボレーション」

1) 題材について

本題材は、前題材「ヴァイオリンを弾こう～擦弦の響き」から連続した題材である。

５月に撥弦楽器である三味線のワークショップを実施した。三味線とヴァイオリンは通常の音楽活動の中では特殊な位置づけのイメージがあり、「よい経験をした」という感想にとどまってしまいがちである。しかし、三味線やヴァイオリンを「よい経験」から「気軽に演奏できる・活用できる」存在として意識させたいと考えた。

そこで本題材では、三味線、ヴァイオリンに長年慣れ親しんでいるソプラノリコーダーを加え、「カノン」という知名度が高く、小学校の教科書にも掲載されている楽曲を使っての合奏をつくることにした。各自の分担の楽器で演奏を試み、それぞれの楽器がもつ発音の特性や持続音、減衰音の特徴を感じ、それらを生かしながら組み合わせを工夫して自分たちの合奏を楽しみ、より三味線・ヴァイオリンに親しむことがねらいである。

「カノン」は、出だしのテーマ提示から徐々にリズムが複雑になり、リコーダーでも最後まで通奏するのは難しい。中には、小学生時にソプラノリコーダーを使ってハ長調で演奏した経験のある生徒

もいる。本題材では、ヴァイオリンと三味線が演奏しやすい調性としてニ長調で演奏するため、派生音の奏法を練習する必要がある。難易度が徐々に上がっていく「カノン」は、生徒の技能の違いに対応した適切な教材曲であると判断した。つまり、学年が上がるにしたがって演奏技能の個人差が開いていく実態に適した楽曲ということである。

冒頭の４小節は三味線とヴァイオリンで全員が弾けるレベル、次の4小節も可能な範囲と考えている。９小節以降は、進度に応じてチャレンジするレベルである。ソプラノリコーダーを中心として三味線・ヴァイオリンは自分の演奏可能な範囲を繰り返すことで「カノン」をつくることを想定している。

本題材のようなヴァイオリンと三味線とリコーダーでつくる「カノン」の合奏は、実験的な活動でもあった。この組み合わせで奏でる「カノン」がどのような音・音楽になるのか、授業者にも予想しきれていなかった。この３つの楽器にコード担当のキーボードと各グループが選択した楽器を加えて、個性的な「カノン」合奏ができるのではないかと予想を立てた。

本題材では、生活班（６名または５名）を１グループとする活動である。人数に合わせ、三味線・ヴァイオリン・リコーダー・キーボードの４パートを必ず配置すること、その他の１～２名は４パートのいずれかを複数にする、または他の楽器を加えてもよいとした。このグループ活動が協働的課題解決の場の中心となる。パートの役割分担の話し合いの場、そして演奏しながら合奏をつくっていく場である。個々の演奏が不十分な状態では活発なグループ活動が実現できない。そのため、合奏をつくっていく活動段階の前に個人練習の時間を確保することが大切である。個人練習が自力でできるように楽譜として五線譜の他に、リコーダーのために文字譜を、ヴァイオリンのためにTAB譜を、三味線のために文化譜を作成した。演奏の入り方の順番や、何小節を単位として繰り返すかといったことをグループごとに工夫していく活動である。

2）授業の概要（４時間扱い）

時間	目標	内容と展開概要
第１時	ソプラノリコーダーで「カノン」を各自の演奏可能な範囲で合奏する。合奏のための役割分担を決める。	○ソプラノリコーダーでニ長調の「カノン」を各自ができる範囲を定めて練習する。 ○グループに分かれ、三味線・ヴァイオリン・リコーダー・その他の楽器の役割分担をする。 ○合奏の構想を話し合い、練習に取り組む。
第２時	合奏のための個人練習とグループ練習をする。	○「カノン」のオーケストラ演奏を鑑賞する。 ○グループに分かれ、合奏の打ち合わせをした後、個人練習をする。 ○グループで合奏練習をする。 ○中間発表の打ち合わせをする。
第３時	合奏のための個人練習とグループ練習をする。中間発表をする	○ソプラノリコーダーで「カノン」を演奏する。 ○グループごとに合奏練習をする。 ○中間発表をし、聴き合ってアドヴァイスし合う。 ○全員で合奏する。
第４時	合奏のためのグループ練習をし、発表会をする。	○グループごとに発表の準備をする。 ○各グループの演奏発表をする。 ○コメントを話し合う。 ○全員で合奏する。

3) 展開

①第１時

	主な学習内容と活動	指導上の工夫・配慮
課題設定	○「カノン」を鑑賞する。 ○楽譜を参考に「カノン」（ニ長調）のテーマ部分をソプラノリコーダーで演奏する。 ○本時の課題	○テーマの楽譜を掲示し、「カノン」の特徴が感じ取れるようにする。 ○ニ長調であることに気を付けるように助言する。
	「カノン」の合奏 ヴァイオリンと三味線とリコーダーでコラボレーション！ グループで分担を決め、各自のパートを演奏できるようにしよう	
課題追究	○グループに分かれ、楽器の分担、合奏の組み立てを話し合う。【思考・判断・表現】 ○各自の分担を練習する。 ○聴きあったり、教え合ったりしながら練習を進める。	○各自ができる範囲を確認し合い、擦弦楽器と撥弦楽器とリコーダーの特性を生かした組み合わせを工夫するように助言する。 ○三味線の文化譜を用意し、「ラ・レ・ラ」の本調子に調弦する。 ○活動場所を割り振り、工夫して練習を進めるように指示する。
省察	○ふり返りをする。【思考・判断・表現】	○各自の今後の見通しを整理するように指示し、グループ内で話し合えるようにする。

②第２時

	主な学習内容と活動	指導上の工夫・配慮
課題設定	○全員でソプラノリコーダーによる「カノン」を演奏する。 ○本時の課題	○授業者はテンポに気を付けてピアノ伴奏をし、全体の響きを聴きながら、助言をする。
	「カノン」の合奏 ヴァイオリンと三味線とリコーダーでコラボレーション！ 各自の分担をしっかりと演奏できるようにしよう	
課題追究	○グループで打ち合わせをした後、個人練習をする。【思考・判断・表現】 ○グループ合奏の練習をする。	○三味線・ヴァイオリンのチューニングを確認する。 ○適宜、指導助言の要請に応じる。
省察	○ふり返りをする。 ・成果と課題を記録し、グループで打ち合わせをする。	○各自の担当パートの練習状況をふり返り、次時の活動の見通しをもてるようにする。

③第３時

	主な学習内容と活動	指導上の工夫・配慮
課題設定	○全員でソプラノリコーダーによる「カノン」を演奏する。 ○本時の課題	○授業者はテンポに気を付けてピアノ伴奏をし、全体の響きを聴きながら、助言をする。
	グループで知恵を出し合い、協力して、「カノン」の合奏をつくろう。 中間発表で聴き合い、感じ取った工夫点とアドヴァイスを伝えよう。	
	○グループで練習すること、共有する課題を一緒に解決しようとすることを確認する。	○お互いに気軽に話し合いながら練習を進めるように指示する。
課題追究	○楽器を用意し、グループに分かれて練習する。【思考・判断・表現】 ○グループで合奏する時間を確保し、お互いに知恵を出し合いながら組み合わせや順序を確認し、合奏をつくる。【思考・判断・表現】 ○練習成果を演奏発表し、聴き合う。【思考・判断・表現】 ○全員で「カノン」を演奏する。	○練習場所を６カ所設定する。(音準-１班、音楽室前-２班、中央-３班、後-４班、廊下-５班・６班) ○テンポに気をつけるように助言し、キーボードのコード演奏を基準に合奏をつくっていくように指示する。 ○発表場所をセッティングする。 ○発表前に工夫点を述べるように指示する。 ○聴き手には、演奏の工夫点に注目すること、アドヴァイスを考えること、を指示する。
省察	○ふり返りをする。 ・自分の課題点を意識しながら練習したか。 ・残された課題点は何か。 ・お互いに意見やアイディアを出し合いながら練習に取り組めたか。	○楽器の後片付けし、「ふり返りカード」に本時の感想・反省・次時への課題等を記入するように指示する。 ○次時の予告をする。

④第４時

	主な学習内容と活動	指導上の工夫・配慮
課題設定	○楽器の準備をする。 ○本時の課題	○各グループが発表しやすいような楽器の配置を工夫する。
	ヴァイオリンと三味線とリコーダーでコラボレーション！ ～グループ発表し、評価し合おう～	

	○グループごとに発表の準備をする。 ○グループごとに演奏発表する。 発表が終わったグループがコメントをする。 初めのグループのコメントは最後のグループが担当する。【思考・判断・表現】 ・1班発表→6班コメント ・2班発表→1班コメント ・3班発表→2班コメント ・4班発表→3班コメント ・5班発表→4班コメント ・6班発表→5班コメント ○クラス全員で「カノン」を合奏する。	○三味線、ヴァイオリンのチューニングを確認する。 ○譜面台や椅子を適宜準備しておく。 ○各グループの合奏の工夫点を聴き取るように助言する。 ○テンポが速くならないように、安定したテンポで演奏するようにうながす。 ○手際よく準備が出来るようにうながす。 ○工夫点を評価し、アドヴァイスする。
省察	○ふり返りをする。 ・各自のグループの演奏、他のグループの演奏の工夫をふり返り、記録する。	○特性の異なる楽器の組み合わせでアンサンブルをつくった学習をふり返り、持続音、減衰音を生かした組み合わせを工夫した合奏について評価をする。

Ⅳ　ヴァイオリン実技授業の一般化に向けて―授業の検証

1　授業の検証～生徒の反応から

(1)　1万円ヴァイオリンが活用可能である根拠として
～聴き比べクイズ「どちらが高いヴァイオリンの音か」の理由で使われた語彙

聴き比べクイズ「どちらが高いヴァイオリンの音か」は、検証対象学年の第1学年の他に第3学年2クラスでも実施した。正解率は、第1学年62.3%（71名/114名）、第3学年73.4%（47名/64名）という結果であった。安久津氏によると、100万円ヴァイオリンは普段から弾き慣れているのに対して、1万円ヴァイオリンは当日初めて弾く楽器で弾き慣れていなかったため、耳の超えている生徒には差がわかったのではないか、であった。安い楽器と高い楽器に違いや差があるのは当然である。しかし、弾き手が優れていれば1万円の楽器でもじゅうぶんに鳴る。逆に、100万円の楽器でも弾き手が未熟であれば鳴らない。

この活動は、クイズという気軽な内容ではあるが、「どちらが高いヴァイオリンの音か」を聴き分けるために、生徒たちなりの観点をもって、集中して聴き入っていた。記述文で使われていた語彙はその観点といえるだろう。

使われた語彙の述べ数は36語で、特に「響き」に注目している割合が4割近いこと、「なめらか」「伸び・伸ばす」にも注目している生徒もいる。つまり、ヴァイオリンの持続音を聴き入って評価をしたことが使われた語彙によってわかった。

音そのものの具体的な様子を表す語彙としては、「響き」「かすれる」「強弱」「変な音・雑音・濁った音」「ギーッ・キーッ」「高音」「低音」「スラー・つなぎ方」「震えている」であり、音のイメージを表す言葉として「なめらか」「きれい」「やわらか」「深い」「はっきり」「やさしい」「澄んでいる、透き通っている」「質感」に分類できる。

この語彙分析の手法については、本研究以降の研究内容となる鑑賞活動における「持続音への気づき」の検証において検討することとし、本調査の結果は予備資料としたい。なお、2名以下の語彙は、「うすっぺらい、音程、はじける、はずんでいる、繊細、まろやか、開放的、迫力、ふんわり、張りがある、太い音、あたたかい、濃い、重い、上品、元気」であった。

(2) スムーズに取り組める活動の根拠として

～「初めてヴァイオリンを弾いてみて」に対する記述文から

主な感想としては、今まで弾いたことがなかったのに擦るだけで意外に簡単に音が出た、押し付けずに軽く弾くと綺麗に出た、弓で弦を擦ると弦が振動して音が出ることがわかった、きれいな音が出てうれしかった、耳の近くで音が出てびっくりした、音が体に響いてきた、くすぐったかった、音を出すのは出来たけれど、いろいろな音程を出すのは難しそう、少しギーギーいうときもあった、楽器を支えるのが大変だった、等である。

「ドラえもんの静香ちゃん」がギィギィと弾くヴァイオリンのイメージがあり、初めて弾く生徒にとっては、変な音が出てしまうのではないか、という不安の原因になっていたようである。

初めて触れるヴァイオリンが、例えば吹奏楽器のように音が出るようになるまでに時間がかかる楽器ではなく、すぐに音が出る楽器であることは、週に1時間の音楽授業で扱うのには都合がいい。「力まずに弦の上を弓がスケーティングをするように」という助言は効果があり、初めて楽器をかまえてから程なく音が出せるようになっていた。開放弦であれば、ほとんどの生徒が気持ちよく音を出すことができたことが記述からわかる。また、初めからボウイングの方法や楽器・弓の構え方について教えるのではなく、まず自由に音を出す活動をさせ、生徒が自ら構え方や弓の持ち方について知りたいと感じてから一つひとつ指導していく方が意欲をもって取り組むことが授業を通してわかった。

(3) 開放弦の音・左指で押さえた音・合奏に対する自己評価と支援

第2時より、「開放弦の音の出し方」「合奏時の音の出し方」を、第3回から「左指で押さえた音の出し方」について、4点満点で自己評価をさせた。その結果が（図7）～（図9）である。

「開放弦の音の出し方」の評価の平均は第2時が3.08点、第3時が3.41点、第4時が3.41点、「合奏時の音の出し方」の評価の平均は第2時が3.54点、第3時が3.46点、第4時が3.26点、と全体的に高かった。仲間と合奏することへの満足度は学習内容が難しくなっても3点以上となっており、協働的な学習は効果が高いことがわかった。

一方、「左指で押さえた音の出し方」の評価は第3時が2.96点、第4時が2.86点と3点を割り、左指の運指が難しく、出来に満足していないと感じていることがわかった。

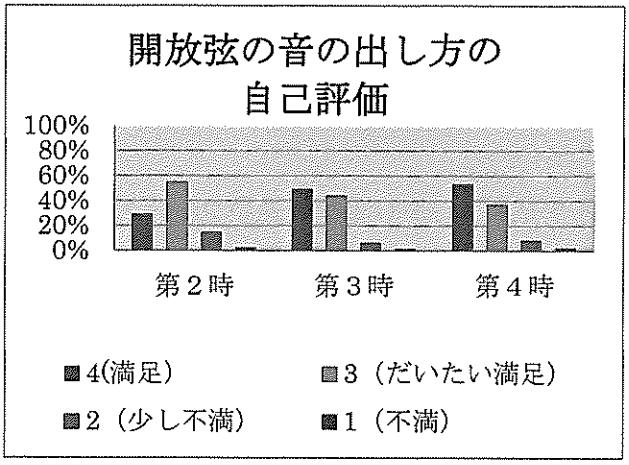
開放弦の音の出し方の自己評価で2点以下と評価した生徒は「弓と弦の角度が悪かったのかギーギーといってしまった」「肩や首が痛くなってしまった」等の理由だった。

左指で押さえた音の出し方は全体的に自己評価が低い理由として、「2弦の薬指、中指のポジションが難しかった」が挙げられた。

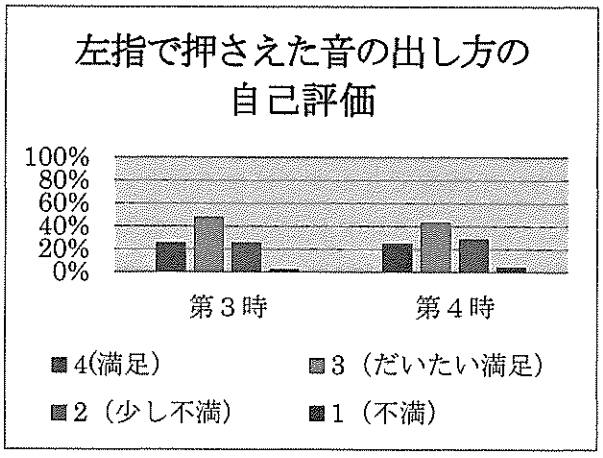
前回よりも低い評価を出している生徒の中には、もっときれいに音が出るはずだ、という気持ちが強くなり、「だいたい満足」や「少し不満」といった厳しい評価をしており、追究心の高まりと取れる傾向が見られた。

一方、１点の評価をした生徒は、左指のポジションがなかなかつかめず、ボウイングも乱れて「もう一度初めから教えてほしい」という感想を書いていた。左指とボウイングを同時に克服することがすぐに対応できる生徒と時間がかかる生徒がいるのは、どの楽器の場合でも同様の表れがある。そこで、つまずきの原因を把握して次時に支援したところ、自力で練習できるようになった。「左手の平を楽器から放して左指を立てて押さえるように」との助言は効果が見られた。また、「もっと進んでもいいと思う」という記述のように、習得が速くもっと難易度の高い活動を求める生徒もいた。今後は、生徒それぞれの進度に合わせた教材を幅広く用意する必要があることを確認した。

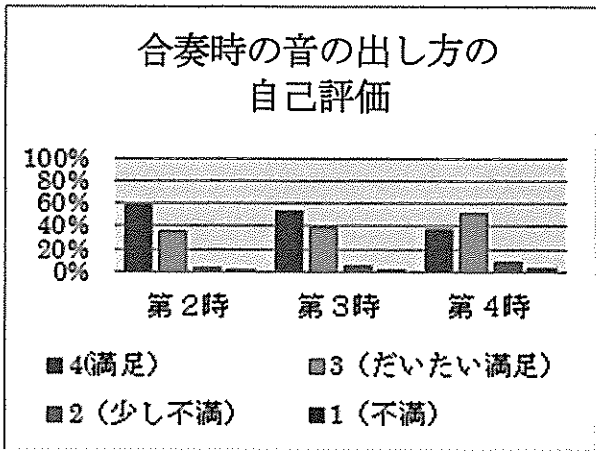
以上から題材「ヴァイオリンを弾こう～擦弦楽器の響き」の授業は妥当であると判断した。



（図７）開放弦の音の出し方の自己評価



（図８）左指で押さえた音の出し方の自己評価



（図９）合奏時の出し方の自己評価

2　グループ活動の効果～協働的問題解決の成果

「ヴァイオリンを弾こう～擦弦楽器の響き～」は、右手のボウイングと左手のポジション押さえが学習内容の中心である。第２時からグループ活動を取り入れた。ヴァイオリンは演奏している姿が目に見えやすいため、円陣を組んでお互いの演奏の姿を見合いながら練習に取り組ませた。互いに見合うことにより、フォームや左指の位置などの点検がスムーズにできた。特に、左指をつかって音程を決める学習活動では、グループの音が一致することを目指して練習すると、短時間で正しい音程が出

せるようになった。

しかし、未経験者だけのグループでは暗中模索な活動となり、教師の支援が必要となった。経験者が混じっているグループは、教わりながら練習を進めることができていた。

ヴァイオリン授業におけるグループ活動は、課題点が共有でき、一緒に演奏するとボリュームが豊かになり、意欲的に音を出して満足感も得られる。課題解決に有効であることが検証された。

「ヴァイオリンと三味線とリコーダーでコラボレーション」は、持続音と減衰音の楽器の組み合わせで「カノン」の合奏をつくるのが学習内容である。

「カノン」は、主題を提示した後はどんどん技能的に困難なレベルに変化していくため、技能差に適した楽曲である。A部分は必ず全員が演奏することとし、その先は演奏可能な範囲を各自で決め、その範囲を繰り返したり、重ねたりしながら合奏としてつくる活動とした。

グループ合奏の工夫の事例を掲げると以下のようになる。

・ヴァイオリン演奏経験者がいるグループでは、ヴァイオリンを経験者が担当して最後まで演奏し、さまざまな進度の他の楽器との重なりを工夫することができた。

・同じく経験者のいるグループでは、経験者のヴァイオリン2台がG部分の速いフレーズから弾き始め、Aに戻って全員で合奏する、という工夫をしていた。

・ドラムを演奏したいという生徒がいるグループでは、ハイハットとスネアのリムショットの演奏でテンポをキープする役目をさせ、安定した演奏ができた。

・その他、必須の3種類の楽器以外には、ギター、クラリネット、フルート、ヴァイブラフォンをそれぞれ組み合わせているグループがあった。クラリネットは、ニ長調の楽譜をホ長調に書き換える作業をしてから練習に取り組んでいた。

この活動では、自由練習時間を多く確保してじゅうぶんに練習できるようにした。その時間の中で自由に教え合ったり、出来たところまで合奏してみたりというように意欲的に活動していた。その様子はふり返りカードに、「ヴァイオリンの上手な人にコツを教えてもらった」「経験者に持ち方を教えてもらった」「ペアの子と2人でカノンを合わせることが出来た。リズムが分からないという人に教えてあげることが出来た」「他のメンバーの迷惑にならないようにがんばる」等の記述が見られた。気軽に教わったり、合わせたり、自分のパートに責任をもって演奏できるようになろうという気持ちをもったなど、意欲的に活動している様子が読み取れた。また、「テンポがどうしても合わないのでメトロノームを使って練習した」というように、合奏が自分のペースでは進まないことに気付き、一定のテンポで演奏できるように工夫して練習に取り組んだ様子もうかがえた。

本題材は、前題材のヴァイオリンの演奏と小学校での既習内容であるリコーダー奏「カノン」と三味線ワークショップでの三味線演奏体験を組み合わせ、グループの協働的課題解決の場面を設定して展開し、生徒のさまざまな経験や持ち味を生かす授業となったと筆者はとらえた。同時に、「カノン」がもつ多様な教材性が有効に作用し、持続音と減衰音の特性の組み合わせを生かす演奏としての題材となったことが検証できた。

3　1万円ヴァイオリンの活用の検証

本研究で使用した1万円ヴァイオリンは、初学者が練習したり演奏したりする上で、次のような点がわかった（○は良い点、△は問題点である）。

○初学者が活動に使うのには、音質も操作性も問題ない。

○すべての弦にアジャスターがあるのは便利である。授業前に教師1人で35台のチューニングを30～40分で行うことができた。

○楽器は番号をふっておき、常に同じ番号の楽器を使用するようにおくとトラブルが少ない。
○肩当てを使用しなくても演奏上、特に問題はなかった。
○第２・３学年でも同様の内容でヴァイオリン授業を実施し、耐久性に問題はなかった。
△10月頃、空気が乾燥し始めた時期に、ペグが緩み、チューニングが安定しなくなった。これに対して、ペグにチョークの粉を擦り付けるといいという助言を楽器店から受けた。
△弓の毛が接着部から根こそぎ取れてしまう破損が４件あった。これは、弓を張りすぎたことが原因である。思うような音が出ず音量を大きくしたいために、弓の張力を強めてしまうケースがあった。常に弓の張り方の状態はチェックする必要がある。スペアの弓は、KC ヴァイオリン弓 VB-25ブラジルウッド＆プラスチック（参考価格2、700円）を購入した。
△１弦が切れやすいが、スペア弦も付いており、すぐに張り替えられた。

以上のことから、初学者ゆえの誤った扱いが原因による弓の破損があったが、１万円ヴァイオリンは授業で問題なく使用することができる楽器ということがわかった。１万円以下で購入できるならば、備品ではなく消耗品の枠での予算化が可能になる。ヴァイオリン実技の授業への道が拓く可能性が出てきたと考える。

4　ヴァイオリンを活用した授業の一般化への考察

ヴァイオリンを活用した授業を一般化するための条件は、楽器を１クラス分の数を揃えられること、演奏経験の乏しい授業者でも実施可能な授業であること、の２つと考えた。

本研究では、１万円ヴァイオリンを購入し、ヴァイオリン演奏経験が乏しい授業者として筆者が授業を立案し、検証を行った。

「聴き比べクイズ」は専門家の技能が必要であったが、それ以外の場面では、専門家の手を借りずに実施することが出来た。検証対象学年以外の第２・３学年でも筆者一人で実践することができた。

楽器の価格、授業者の演奏経験の２つの問題がクリアできたことから、ヴァイオリンの実技授業、ヴァイオリンを活用した授業の一般化が可能であることが検証できたと考えている。

Ⅴ　研究のまとめ

1　結論

本研究は、研究テーマ「擦弦楽器の演奏体験が及ぼす表現及び鑑賞の能力伸長の可能性」を受け、研究仮説「擦弦楽器の演奏体験をすれば、持続音の表現への気づきが育ち、表現及び鑑賞の能力が伸長するだろう」を立て、この仮説の「擦弦楽器の演奏体験をすれば」の部分のための授業開発が目的であった。

結論は以下のとおりである。

(1) 演奏経験が乏しい教員でも実施できるヴァイオリンを活用した授業を開発することができた（題材：「ヴァイオリンを弾こう～擦弦楽器の響き～」、題材：「ヴァイオリンと三味線とリコーダーでコラボレーション」）

(2) １万円ヴァイオリンは授業で十分に活用できることが検証できた。ヴァイオリンは分数楽器であり、体の大きさに合わせた楽器を使うが、中学生は４/４サイズであり、さまざまな大きさの楽器を揃えずにすむため、中学校以上の方が楽器を揃えやすい。

本研究において１万円ヴァイオリンを活用して演奏経験が乏しい教員でも運営できる実技授業を開発できたことにより、ヴァイオリン授業の一般化への道が拓くことが期待できる。

2　今後の課題

結論を受け、今後は研究仮説に沿って、持続音の表現への気づき（鑑賞能力の検証）、さらに、持続音の表現力の伸長（歌唱活動と創作活動での検証）へ研究をすすむこととなる。

さらに、生徒がヴァイオリン演奏経験を積むことによって他の表現活動や鑑賞活動において、持続音の表現に対する新たな気づきの視点が育っているのかどうかを明らかにするために、検証授業を立案、実施して検討を加えていくこととする。

本研究を通して、生徒たちにとってヴァイオリンが「聴く活動」では身近な音でありながら、実物の楽器や演奏には縁遠かった状態から、身近で活用できる楽器として存在する方向に向いてきたと考えている。

参考文献

大津圭子：「いちばんやさしい　バイオリン入門レッスン」株式会社オンキョウパブリック、2013
川合左余子：「いまさら聞けないヴァイオリンの常識」音楽之友社、2014
川幡宏：「はじめての弦楽器メンテナンスブック」株式会社ヤマハミュージックメディア、2010
鈴木慎一：「スズキメソード 鈴木鎮一 ヴァイオリン指導曲集（1)」全音楽譜出版、2009
中山由美：「身近な音楽を起点とする授業マネジメントに関する研究」閏月社、2014

脚注

1　本調査は第２学年２クラス57名を対象に2014年10月15日に実施した。

2　「授業マネジメント」とは、「子どもが主体的・創造的に活動できる授業の環境をつくるために、子どもの実態やニーズを踏まえた授業を構成し、子どもの活動、反応、状況に適切に対応し、人的・物的資源を授業の構成要素として配置してつなぐ、さらに、授業と授業外の世界とをつなぐこと」と定義している。中山（2014）pp.41.

3　Amazon のサイトを参考にした。http://www.amazon.co.jp/product-reviews/B002YMPZOS/ref=cm_cr_dp_see_all_summary?ie=UTF8&showViewpoints=1&sortBy=byRankDescending（2015.5.5閲覧）

4　アジャスターの写真は、Amazon サイトから転載した。
http://www.amazon.co.jp/Hallstatt-%E3%83%8F%E3%83%AB%E3%82%B7%E3%83%A5%E3%82%BF%E3%83%83%E3%83%88-%E3%83%B4%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%82%AA%E3%83%AA%E3%83%B3-V-12-4%E3%82%B5%E3%82%A4%E3%82%BA%E3%83%90%E3%82%A4%E3%82%AA%E3%83%AA%E3%83%B3/dp/B002YMPZOS/ref=sr_1_1?s=musical-instruments&ie=UTF8&qid=1430781964&sr=1-1&keywords=violin（2015.5.5閲覧）

5　「音楽のおくりもの６」（平成27年度版）、教育出版社、pp.16-17.　教科書に楽器の指定はないが、多くはソプラノリコーダー２部 合奏に電子キーボードのチェンバロ・チェロの音色を使って演奏する。

なお、本研究は平成26年度科学研究費助成事業奨励研究（課題番号：26908034）及び、平成27年度科学研究費助成事業奨励研究（課題番号：16H00139）の助成を受けて行ったものである。